


 書評

高橋三郎, 染矢俊幸, 塩入俊樹 訳

DSM-IV-TR ケースブック【治療編】

大森哲郎

DSM-IV-TR のイメージを具体的に理解するための書

経過を聞き、所見を取り、診断を立て、治療方針を考える、この作業を我々は日々行っている。本書では、精神疾患各種 34 症例の経過と症状が記述され、DSM-IV-TR に従って診断が鑑別され、さらに症例によってはその後の経過までもが提示されている。これによって、それだけ読んでも具体的なイメージがわきにくい DSM-IV-TR の診断基準が、事例に即して生き生きと伝わってくる。ここまでは、すでに出版されている DSM-IV-TR ケースブックと同様である。

その姉妹編である本書の眼目は実はその先にある。それぞれの症例について、その疾患の名だたる専門家が、一般的な治療指針にとどまらず、自分ならどのように治療するかをかなり踏み込んで率直に語っているのである。あまりに操作的であるがゆえに、研究目的の診断確定には有用でも実際の臨床には不向きと思われがちな DSM システムであるが、そんなことはないことが臨場感を持って納得できる。むしろ、現在の代表的な治療法が DSM 診断体系に基づいて研究されているからには、この診断体系との照合なしに、治療を論じることはできないのである。本書は 34 症例の見事な臨床検討記録となっている。

診断分類の理想は、診断が樹立されれば治療方針も自ずと決定するような、原因や病態に基づく分類であるが、精神疾患にとっては現時点では望むべくもない。DSM 分類が、原因を棚上げした分類であるからには、診断名だけでは治療方針に直結しないのはむしろ当然である。それぞれの専門家は、それぞれの症例において、症状の特徴を整理し、家族歴や成育歴を参照し、身体的ならびに精神科的な併存症の有無

を考慮し、慎重に診断を確定している。そのうえで、支持的対応、薬物療法、認知行動療法、社会的サポートなどに至るまで幅広く見渡し、自分ならこうするという治療方法を述べている。

読者は、興味のある疾患からでも、名前に馴染みのある専門家が担当している症例からでも、どこからでも読み始めることができる。専門家たちは、ときに慎重に、ときにはずいぶん大胆に、しかしおしなべて率直に本音を語っているようにみえる。研究論文の無機質な記述よりは、症例の治療方針を語るときに、考え方や個性がのびのびと表現されるらしい。一例を挙げると、診断確定が遅れ、薬物治療が変転したのち 1 年たつてようやく寛解した精神病性の特徴を伴う大うつ病症例に対する、ECT(電気けいれん療法)の大家のマックス・フィンク博士のコメントは、「彼の行動を評価した精神科医達のばかき加減を見よ」、「なぜ彼はそれほどひどい治療を施行されたのか」、「ECT を施行しなかったことに弁明の余地はない」という激しい調子である。

境界性パーソナリティ障害、パニック障害、統合失調症様障害の 3 症例では、2 人の著明な専門家のコメントを競合させるという読者の興味を引く仕掛けもある。また、別々の慢性統合失調症を語る 2 人の専門家は、期せずして経済優先の医療制度に対する批判の声をそろえる。DSM-IV-TR に準拠した臨床検討記録を読みながら、米国精神医学の実情と層の厚さを垣間見る思いにもかられる。初学者からベテランまで、さまざまな読み方が可能な、興味の尽きない良書である。

(徳島大学精神医学教授)

● A5 320 頁 2006 定価 5,775 円 (本体 5,500 円+税) 医学書院